○奥様の琴

岩代須賀川本町　服部水仙

内の奥様此頃はさつぱりお琴をお弾きなさらない去年の二月に旦那様が、お出征になつてから此方。丁度あれは二月の九日であつた、旦那様が明日はお出征と云ふ前の晩、大層よいお月夜の晩であつたが、旦那様と奥様と、琴と笛の合奏をなすつた。悲しい様な哀れな様なお歌で……蔭で聞いてた私達も思はずホロリとしたのであつた。

其の時から少しもお琴にお手を、お觸れなさらない。何故とお聞き申ても、たゞ微笑なさるばかりで、それでもお琴は大層お大切になさる。毎朝お掃除の役はいつも私なのだ、それがまた私に取つて、此上無い樂しみなのだ、私の様な者がはたきで敲いてもコロンコロリンと優しい音を立てる。それだのに、あゝ奥様がお弾きなされたなら……

今年も最早秋になつた。相變らず毎朝お掃除するお琴は怨めしい音を立てる様になつたが、奥様は如何な淋しい日でも決してお琴をお弾きなさらない。朋輩のお竹どんはいつもこふ云ふのだ「奥様は旦那様が丈夫でお歸りになつてまた合奏をなさるのを待つて居らつしやるのだと。

お庭の青桐の一葉がサラ〳〵と散つて、降りそゝぐ雨の音淋しい、何となくもの淋しい日であつた。電報！の聲に私が受取つて、机に向つて何か考ひて居らつした奥様の前に差出した時、その時、幽かな震がお唇に昇ると見る間に、開かれたみ手はワナ〳〵と震ひ、お顔は眞青になつて、ワツトばかり……あゝ其時私は如何して宜いやらわからなかつた。やがてつと起つて佛間にお入りなされた奥様は、やがて現はれた奥様はあゝ舊の奥様では無かつた。彼の房々としたみ髪は、根元からフツツリと……

あゝ　旦那様は戰死なされたのだ！

奥様は切下げ髪の未亡人になられたのだ！

一月許過ぎてから、旦那様の遺骨は、遺品と一緒に到

着(い)た。血に汚れた軍服、血糊(ちのり)の附着(つい)たサーベル、破れた軍帽(ぐんぼう)、皆思ひ出の種(たね)なる遺品(かたみ)のうちに、彼(か)の笛もあつた。然(しか)しそれも舊(もと)の儘(まゝ)では無い、彈丸の爲めとやらで、眞中から二つに折れてあつた、奥様はそれを見て大層お泣きなさつた。

或る日の事である、いつもの通りお琴のお掃除を始めると、如何した途端(はづみ)か一本の糸はプツリと切れてしまつた、あゝ私は如何仕様お大切のお琴を・・・・・と泣きそうになつて居る處(ところ)え、奥様はお出(い)でになつた。私が涙を流してお詫びするのを默つて聞えて居られたが、引出しから小刀(ナイフ)を出されたかと見る間に、糸は怪しい音を立て、空(くう)に飛び上つた。お怒りの餘りかとはツとして、御袖(おそで)に縋ツてお詫びするのを「いゝえ心配するには及びませんどうせ用(よう)の無い琴ですから・・・・・」と微笑(おわらひ)なされた其顔の淋しかつたこと・・・・・・・・・・

【入力者注】

底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本：「女子文壇」第壹卷第七號
明治三十八(1905)年
テキスト入力：小林　徹
公開：令和六年三月二十六日

リンク：「作品年譜」
水野仙子ホームページ